文部省著作教科書

高等國語

三上

文部省

K270.8
1
3.1a

K270.8
1
3.1a

高等國語

三上

文部省

文部省著作權所有

目錄

一　奥の細道抄……一
二　寒山拾得……六
三　シェークスピアの女性觀……一六
四　天上の序曲……二〇
五　ガラス戸の中……二八
六　年來稽古……四四
七　國民的文学と世界的文学……四九
附錄　國語学習の手引……五九

奥の細道抄

松尾芭蕉

門出

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老を迎へる者は日々旅にして旅を住みかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋にくもの古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てるかすみの空に白河の関越えんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取る物手につかず、もゝひきの破れをつゞり、かさの緒附けかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住みかはる代ぞひなの家

表八句をいほりの柱に掛けおく。

彌生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花のこず為、またいつかはと心細し。むつまじき限りは、よひよりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙

これを矢立のはじめとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、うしろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

ことし元禄二年にや、奥羽長途の行脚、たゞかりそめに思ひ立ちて、奥天に白髪の恨みを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、もし生きて帰らばと、定めなき頼みの末をかけ、その日やうやく草加といふ宿にたどり着きにけり。

痩骨の肩にかゝれる物、まづ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがにうち捨てがたくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

白河

心もとなき日かず重なるまゝに、白河の関にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしもことわりなり。中にもこの関は三関の一にして、風騒の人、心をとゞむ。秋風を耳に残し、もみぢを面影にして、青葉のこずゑなほあはれなり。うの花の白妙に、いばらの花の咲き添ひて、雪にも越ゆるこゝちぞする。古人冠を正し、衣裳を改めしことなど、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

うの花をかざしに関の晴れ着かな　　曾良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼といふ所を行くに、けふは空曇りて物影映らず。須賀川の駅に等躬といふ者を尋ねて、四、五日とどめらる。まづ白河の関いかに越えつるやと問ふ。長途の吉しゐ、身心疲れ、かつは風景に魂奪はれ、懐旧にはらわたを断ちて、はか〳〵しう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植うた

松島

そも〳〵ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の数を盡くして、そばだつものは天を指さし、ふすものは波に腹ばふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に分かれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、児孫愛すがごとし。まつの緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その氣色窅然として美人の顔をよそふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を振るひ、ことばを盡くさん。

雄島が磯は、地続きて海に出でたる島なり。雲居禅師の別室の跡、坐禅石などあり。はた、まつの木陰に世をいとふ人もまれ〳〵見え侍りて、落ち穂・まつかさなどうちけぶりたる草のいほり静かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしく立ち寄るほどに、月海に映りて、晝のながあまた改む。江上に帰りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寝するこそ、怪しきまで妙なるこゝちはせらるれ。

松島やつるに身をかれほとゝぎす　　曾良

予は口を閉ぢて眠らんとして寝ねられず。旧庵を別るる時、素堂、松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きてこよひの友とす。かつ、杉風・潤子が発句あり。

平泉

十二日平泉と志し、あねはのまつ、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに、雉兎・蒭蕘の行きかふ道、そこともわかず、つひに道ふみたがへて、石巻といふみなとに出づ。黄金花咲くと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、数百の回船入江につどひ、人家地を爭ひて、かまどの煙立ち続けたり。思ひかけずかゝる所にも來たれるかなと、宿借らんとすれど、更に宿貸す人なし。やうやくまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の萱原など、よそ目に見て、はるかなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉にいたる。その間二十余里ほどと覚ゆ。

三代の栄燿一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は衣が関を隔てて、南部口をさし堅め、えぞを防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時のくさむらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、かさうち敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

曾良

うの花に兼房見ゆる白毛かな

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七宝散り失せて、珠のとびら風にやぶれ、黄金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廢空虚のくさむらとなるべきを、四面あらたに囲みて、甍を覆うて風雨をしのぐ。しばし千歳のかたみとはなれり。

さみだれの降り残してや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、ことに清閑の地なり。一見すべきよし人人の勧むるによりて、尾花沢より取つて返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。ふもとの坊に宿借りおきて、山上の堂に登る。岩にいはほを重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて、こけ滑らかに、岩上の院々とびらを閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり、岩をはひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄み行くのみ覚ゆ。

閑かさや岩にしみ入るせみの声

最上川

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。碁点・隼などいふ恐ろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟をくだす。これに稲積みたるをや稲舟といふならし。白糸の滝は青葉のひま〳〵に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水みなぎつて舟あやふし。

さみだれをあつめて早し最上川

象潟

江山水陸の風光、数を盡くして、今象潟に方寸をせむ。酒田のみなとより東北の方、山を越え、いそ

を傳ひ、いさごを踏みて、その際十里。日影やゝかたぶくころ、潮風まさごを吹きあげ、雨朦朧として烏海の山隱る。暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また賴もしと、海人のとま屋にひざを入れて、雨のはるるを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟をあがれば、花の上こぐと詠まれし櫻の老い木、西行法師のかたみを殘す。寺を干滿珠寺といふ。

この寺の方丈に坐してすだれを卷けば、風景一眼のうちに盡きて、南に烏海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむや〳〵の関路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道はるかに、海北に構へて、波うち入る所を汐越といふ。江の縱横一里ばかり、一面影松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

汐越やうゐ脚ぬれて海涼し

二　寒山拾得

森鷗外

唐の貞觀のころだというから、西洋は七世紀のはじめ、日本は年号というもののやっとできかゝった時である。閭丘胤という官吏がいたそうである。もっとも、そんな人はいなかったらしいという人もある。なぜかというと、閭は台州の主簿になっていたといい傳えられているのに、新旧の唐書に傳が見えない。主簿といえば、刺史とか太守とかいうと同じ官である。中國全國が道に分かれ、道が州または郡に分かれ、それが縣に分かれ、縣の下に鄉があり、鄉の下に里がある。州には刺史といい、郡には太守という。一体日本で縣より小さいものに郡の名をつけているのは不都合だと、吉田東伍さんなどは不服を唱えている。閭が果たして台州の主簿であったとすると、日本の府縣知事ぐらいの官吏である。そうしてみると、唐書の列傳に出ているはずだというのである。しかし、閭がいなくては話が成り立たぬから、ともかくもいたことにしておくのである。

さて、閭が台州に着任してから三日目になった。長安で、華北の土ぼこりをかぶって、濁った水を飲んでいた男が、台州に來て華中のこえた土を踏み、澄んだ水を飲むことになったので、上機嫌である。それに、この三日の間に、多人數の下役が來て謁見をする。受持受持の事務を形式的に報告する。そのあわたゞしい中に、地方長官の威勢の大きいことを味わって、意氣揚々としているのである。

閭は、前日に下役のものに言っておいて、けさは早く起きて、天台縣の國清寺をさして出かけることにした。これは長安にいた時から、台州に着いたらさっそく行こうときめていたのである。

なんの用事があって國清寺へ行くかというと、それには因縁がある。閭が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立とうとした時、あいにくこらえられぬほどの頭痛が起った。單純なリューマチス性の頭痛ではあったが、閭は平生から少し神經質であったので、かゝりつけの医者の藥を飲んでもなか〳〵なおらない。これでは旅立ちの日を延ばさなくてはなるまいかと言って、女房と相談していると、そこへ小女が來て、「だゞいま御門の前へこじき坊主が參りまして、御主人にお目にかゝりたいと申しますが、いかゞいたしましょう。」と言った。

「ふん、坊主か。」と言って閭はしばらく考えたが、「とにかく会ってみるから、こゝへ通せ。」と言い

つけた。そして女房を奥へひっこませた。

元來、閭は科挙に應ずるために、経書を読んで五言の詩を作ることを習ったばかりで、佛典を読んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし、僧侶や道士というものに対しては、なぜということもなく尊敬の念を持っている。自分の会得せぬものに対する、盲目の尊敬とでもいおうか。そこで、坊主と聞いて会おうと言ったのである。

まもなくはいって來たのは、ひとりのせいの高い僧であった。垢つき破れた法衣を着て、長く伸びた髪をまゆの上で切っている。目にかぶさってうるさくなるまでうちやっておいたものと見える。手には鉄鉢を持っている。

僧はだまって立っているので、閭が問うてみた。「わたしに会いたいと言われたそうだが、なんの御用かな。」

僧は言った。「あなたは、台州へお出でなさることにおなりなすったそうでございますね。それに、頭痛に悩んでおいでなさると申すことでございます。私はそれをなおして進ぜようと思って参りました。」

「いかにも言われる通りで、その頭痛のために出立の日を延ばそうかと思っていますが、どうしてなおしてくれられるつもりか。何か薬方でも御存じか。」

「いや。四大の身を悩ます病は幻でございます。ただ、清浄な水がこの受糧器に一ばいあればよろしい。まじないでなおして進ぜます。」

「はあ、まじないをなさるのか。」こう言って少し考えたが、「子細あるまい、一つまじなってくださいい。」と言った。これは医道のことなどは、平生深く考えてもおらぬので、どういう治療ならさせる、どういう治療ならさせぬという定見がないから、ただ自分の悟性に依頼して、そのおりおりに判断するのであった。もちろんそういう人だから、かりつけの医者というのも、よく人選をしたわけではなかった。素問や霊枢でも読むような医者をさがしてきめていたのではなく、近所に住んでいて呼ぶのにめんどうのない医者にかかっていたのだから、ろくな薬は飲ませてもらうことができなかったのである。今、こじき坊主に頼む氣になったのは、なんとなくえらそうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ばいでするまじないなら、まちがったところで危険なこともあるまいと思ったのとのためである。

閭は小女を呼んで、くみたての水をはちに入れて來いと命じた。水が來た。僧はそれを受け取って、胸にさゝげて、じっと閭を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもよい、湯でも茶でもよいのである。不潔な水でなかったのは、閭がためにはもっけの幸であった。しばらく見つめているうちに、閭は、おぼえず精神を僧のさゝげている水に集注した。

この時、僧は鉄鉢の水を口にふくんで、突然ぷっと閭の頭に吹きかけた。

閭はびっくりして、背中にひや汗が出た。

「お頭痛は。」と僧が問うた。

「あ。なおりました。」実際、閭はこれまで、頭痛がすると氣にしていて、どうしてもなおらせずにいた頭痛を、坊主の水に氣を取られて、取り逃がしてしまったのである。

僧は、静かにはちに残った水を床に傾けた。そして、「そんならこれでおいとまをいたします。」と

言うやいなや、くるりと閭に背甲を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、ちょっと。」と閭が呼びとめた。

僧は振り返った。「何か御用で。」

「寸志のお礼がいたしたいのですが。」

「いや。私は群生を福利し、驕慢を折伏するために、こじきはいたしますが、療治代はいただきませぬ。」

「なるほど。それではしいては申しますまい。あなたはどちらのおかたか、それを伺っておきたいのですが。」

「これまでおった所でございますか。それは天台の國清寺で。」

「はあ。天台におられたのですな。お名は。」

「豐干と申します。」

「天台國清寺の豐干とおっしゃる。」閭は、しっかりおぼえておこうと努力するように、まゆをひそめた。「わたしもこれから台州へ行くものであってみれば、ことさらおなつかしい。ついでだから伺いたいが、台州には、会いに行ってためになるような、えらい人はおられませんかな。」

「さようでございます。國清寺に拾得と申すものがおります。実は普賢でございます。それから、寺の西の方に、寒巖という石窟があって、そこに寒山と申すものがおります。実は文殊でございます。さようならおいとまをいたします。」こう言ってしまって、ついと出て行った。

こういう因縁があるので、閭は天台の國清寺をさして出かけるのである。

全体、世の中の人の、道とか宗教とかいうものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、たゞ営々役々と年月を送っている人は、道というものをかえりみない。これは読書人でも同じことである。もちろん、書を読んで深く考えたら、道に到達せずにはいられまい。しかし、そうまで考えないでも、日々のつとめだけは弁じて行かれよう。これは全く無頓着な人である。

次に、着意して道を求める人がある。専念に道を求めて、万尋をなげうつこともあれば、日々のつとめは怠らずに、絶えず道に志していることもある。儒学にはいっても、道教にはいっても、佛法にはいっても、キリスト教にはいっても、同じことである。こういう人が深くはいりこむと、日々のつとめが卽ち道そのものになってしまう。つゞめていえば、これはみな道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道というものの存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓着だというわけでもなく、さればといってみずから進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だとあきらめ、別に道に親密な人がいるように思って、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、單に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して言ってみると、道を求める人なら、おくれているものが進んでいるものを尊敬することになり、こゝにいう中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することのできぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、たま〳〵それをさし向ける対象が正鵠を得ていても、なんにもならぬのである。

閭は、衣服を改め、輿に乗って、台州の官舎を出た。従者が数十人ある。

時は冬のはじめで、霜が少し降っている。椒江の支流で、始豐溪という川の左岸を迂回しつゝ北へ進んで行く。はじめ曇っていた空がよう〳〵晴れて、あお白い日が岸のもみじを照らしている。路で出会う老幼は、みな輿を避けてひざまずく。輿の中では、閭がひどくよい心持になっている。牧民の職にいて賢者を礼するというのが、手がらのように思われて、閭に満足を與えるのである。

台州から天台縣までは六十里半ほどである。日本の六里半ほどである。ゆる〳〵輿を舁かせて來たので、縣から役人の迎えに出たのに会った時、もう午を過ぎていた。知縣の官舍で休んで、馳走になりつゝ聞いてみると、こゝから國清寺までは、つまさきあがりの道がまた六十里ある。行き着くまでには夜に入りそうである。そこで閭は、知縣の官舍に泊ることにした。

翌朝、知縣に送られて出た。きょうもきのうに変わらぬ天氣である。一体、天台一万八千丈とは、いつだれが測量したにしても、しょせん高過ぎるようだが、とにかくとらのいる山である。道はなかなかきのうのようにははかどらない。途中で午飯を食って、目が西に傾きかゝったころ、國清寺の三門に着いた。智者大師の滅後に、隋の煬帝が立てたという寺である。

寺でも、主簿の御参詣だというので、おろそかにはしない。道翹という僧が出迎えて、閭を客間に案内した。さて茶菓の饗應がすむと、閭が問うた。「当寺に豐干という僧がおられましたか。」

道翹が答えた。「豐干とおっしゃいますか。それは先ごろまで、本堂のうしろの僧院におられましたが、行脚に出られたきり、帰られませぬ。」

「当寺では、どういうことをしておられましたか。」

「さようでございます。僧どものたべる米をついておられました。」

「はあ。そして何かほかの僧たちと変わったことはなかったのですか。」

「いえ。それがございましたので、はじめ、たゞ骨惜しみをしない、親切な同宿だと存じていました豐干さんを、私どもがたいせつにいたすようになりました。すると、ある日ふいと出て行ってしまわれました。」

「それはどういうことがあったのですか。」

「全く不思議なことでございました。ある日、山からとらに乗って帰って参られたのでございます。そしてそのまゝ廊下へはいって、とらの背で詩を吟じて歩かれました。一体、詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ。活きた阿羅漢ですな。その僧院のあとはどうなっていますか。」

「たゞいまもあきやになっておりますが、おり〳〵夜になると、とらが参ってほえております。」

「そんなら、御苦労ながら、そこへ御案内を願いましょう。」こう言って、閭は座を立った。

道翹は、くもの網を拂いつゝ先に立って、閭を豐干のいたあきやに連れて行った。日がもう暮れかかったので、薄暗い屋内を見まわすに、がらんとして何一つない。道翹は身をかゞめて、石疊の上のとらの足跡を指さした。たま〳〵山風が窓の外を吹いて通って、うずたかい庭の落ち葉をまきあげた。その音が、寂寞を破ってざわ〳〵と鳴ると、閭は、髪の毛の根をしめつけられるように感じて、全身のはだにあわを生じた。

閭はせわしげにあきやを出た。そして、あとからついて來る道翹に言った。「拾得という僧はまだ当寺におられますか。」

道翹は不審らしく閭の顔を見た。「よく御存じでございます。先刻あちらのくりやで、寒山と甲すものと火にあたっておりましたから、御用がおありなさるなら、呼び寄せましょうか。」

「はゝあ。寒山も來ておられますか。それは願ってもないことです。どうぞ御苦労ついでにくりやに御案内を願いましょう。」

「承知いたしました。」と言って、道翹は本堂について西へ歩いて行く。

閭がうしろから問うた。「拾得さんはいつごろから当寺におられますか。」

「もうよほど久しいことでございます。あれは、豐干さんがまつ林の中から拾って帰られた捨て子でございます。」

「はあ。そして当寺では何をしておられますか。」

「拾われて参ってから三年ほどたちました時、食堂で上座の像に香をあげたり、燈明をあげたり、そのほか、供えものをさせたりいたしましたそうでございます。そのうち、ある日上座の像に食事を供えおいていて、自分が向き合っていっしょに食べているのを見つけられましたそうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜずにいたしたこととみえます。たゞいま、くりやで僧どもの食器を洗わせております。」

「はあ。」と言って、閭は二足三足歩いてから問うた。「それから、たゞいま寒山とおっしゃったが、そればどういうかたですか。」

「寒山でございますか。これは、当寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでおりますものでございます。拾得が食器を洗います時、残っている飯や菜を竹の筒に入れて取っておきますと、寒山はそれをもらいに参るのでございます。」

「なるほど。」と言って、閭はついて行く。心の中では、そんなことをしている寒山・拾得が文珠・普賢なら、とらに乗った豐干はなんだろうなどと、田舎者がしばいを見て、どの役がどの俳優かと思い惑う時のような氣分になっているのである。

「はなはだむさくるしい所で。」と言いつゝ、道翹は閭をくりやのうちに通れこんだ。

こゝは、湯氣がいっぱいこもっていて、にわかにはいってみると、しかと物を見定めることもできぬくらいである。その灰色の中に大きいかまどが三つあって、どれにも残ったまきがまっかに燃えている。しばらく立ちどまって見ているうちに、石の壁に沿うて造りつけてある机の上で、大勢の僧が飯や菜やしるをなべかまから移しているのが見えて來た。

この時、道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得。」と呼びかけた。

閭がその視線をたどって、入口から一番遠いかまどの前を見ると、そこにふたりの僧のうずくまって火にあたっているのが見えた。

ひとりは、髪の二、三寸伸びた頭をむき出して、足には草履をはいている。いまひとりは、木の皮で編んだ帽をかぶって、足には木屐をはいている。どちらも、やせてみすぼらしい小男で、豐干のような大男ではない。

道翹が呼びかけた時、頭をむき出した方は、ふり向いてにやりと笑ったが、返事はしなかった。これが拾得だと見える。帽をかぶった方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。

間はこう見当をつけて、ふたりのかたわらへ進みよった。そしてそでをかき合わせてうや〳〵しく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱國、賜緋魚袋、閭丘胤と申すものでございます。」と名のった。

ふたりは同時に間を一目見た。それからふたりで顔を見合わせて、腹の底からこみあげて來るような笑い声を出したかと思うと、いっしょに立ちあがって、くりやをかけ出して逃げた。逃げしなに寒山が、「豊干がしゃべったな。」と言ったのが聞えた。

驚いて跡を見送っている間が周圍には、飯や菜やしるを盛っていた僧らが、ぞろ〳〵と來てたかった。道翹はまっさおな顔をして立ちすくんでいた。

（『外全集』）

三　シェークスピアの女性観

豊田　実

四　天上の序曲

（ラジオ放送原稿による）

ゲーテ

主。天軍の群れ。後にメフィストーフェレス。
三人の大天使進み出る。

ラファエル

日輪は昔ながらのひびきに
同胞なる天界と歌を競ひ、
よさされしその旅路を
雷の歩みもて全くす。
そを観れば天使力づく、
極むるはたれ人も力及ばねども。
思議を超えていと高き御業こそ
創造の日のまゝに厳しけれ。

ガブリエル

さて速やかに、思議を超えて速やかに、
まぐはしき大地ぞめぐりめぐる。
楽園なす明かるさは深き夜の
怖ろしき夜と往きつ來つ、
大海は廣潮なして、底深き
巖に激ち沸きかへり、
その巖もその大海も、とはに速き
天界の軌道にひきぞゆかるる。

ミカエル

さて疾風は競ひつゝ、海より陸へ、

陸より海へ、すさび吹き、
荒れ狂ひつゝ、鎖なすいと深き作用をぞ
めぐりには作り出づる。
ともすればひらめき落つる禍つ火
雷霆の路の行手にきらめき立つ——
されど主よ、きみが常晝の穏しき歩みをこそ
御使たちは崇めまつれ。

三人にて

観るまゝに天使力づく、
きみを極むるはたれ人も力に及ばねど。
さてきみがいと高き御業のすべてこそ
創造の日のまゝに厳しけれ。

メフィストーフェレス

おだんな、あなたがまた見えられて、、
こちとらのところで万事どう行っているか、おたずねなさる。
それにあなたはふだんいつも喜んでわたしにお会いくださったので、
御覽の通り御家來の中にわたしもまかり出ました。

御免なさい、わたしは高尚ぶったことばは使えやしません。
一座の者がみんなわたしをさげすむにしろ、どうにもなりませんや。
わたしが熱に浮かされたようなことを言ったら、あなたはきっとお笑いなさるでしょう、
もっとも笑いをお忘れなすったんならかくべつですがね。
太陽だの宇宙だののことは、知らないから何もいえません。
わたしの目につくのは、たゞ、人間がどんなに悩んでいるかということばかりでさあ。
この世のちっちゃな神様ときたら、いつまでたっても同じこしらえで、
それこそ創造の日のまゝにきてれつですよ。
あなたが天の光の影をやつらにやるようなまねをなさらなかったら、
人間もちっとはましの暮らしができたんでしょうがね。
やつらはそれを理性と呼んで、その使いみちときては、
たゞどの獣よりももっと獣臭くふるまう用にするばかりなのです。
だんなさまの御免をこうむって申してみようなら、
やつらは脚の長いばったのようにわたしには思われますね。
いつでも飛ぼうとして、飛ぶ氣で跳ねて
すぐに草中に落ちては昔ながらの歌を歌う、あれですな。
せめていつまでも草の中にいてくれたらまだしもなのに、
やつ、どぶというどぶに鼻を突っこむときていやがる。

主

おまえがわしに言うことはそれだけか。
おまえはいつでもたゞ苦情ばかり言いに來るのか。
地上のことはことゝ〳〵く、おまえには永劫に氣に入らないのか。

メフィストーフェレス

氣に入りませんね、だんな、かしこのことはあいも変わらず心底から悪いと思えますね。
悲惨な目を見ている人間どもはわたしの氣を腐らせますね。
このわたしでさえあのかわいそうなやつらを痛めつけるのがいやになりますね。

主

おまえはファウストを知っているか。

メフィストーフェレス

あの博士ですかい。

主

わしのしもべだ。

メフィストーフェレス

全くだ。あれは特別な流儀であなたに仕えていますな。
あのばか者の飲み物もたべ物も、地上のものではありませんな。
沸き立つ心があれを遠くの方へ駆り立てている、
自分でも自分の氣違いが半分わかっているのでしょう。
あれが天に要求するものは最も美しい星だ。
地に求めるものはありとある最上の快樂だ——
そうして近いものも遠いものもみんな、
底から騒だっている胸を満足させはしないのですね。

主

あれは今こそたゞ混沌としてわしに仕えているが、
わしはまもなくあれを明澄の境へ導き入れるであろう。
庭つくりでも、若木が綠する時、
花と実が來る年々を飾ることを知っているではないか。

メフィストーフェレス

あなたは何をかけなさる。あなたは結局あの男を奪われますぜ、
もしもあなたがわたしに、あの男をつらまえてそろりそろりと
わたしの道を引きまわすことをお許しくださるなら。

主

あれが地上に生きている間は、
その間はそれもとめはしない。
努力している間は、人間は迷うものだ。

メフィストーフェレス

それはありがたい仕合わせですな。いったい死人なんぞを
好きでいじくったことは、わたしは一度もありはせなんだ。
わたしがいっとう好きなのは、たっぷりした、みず〳〵したほっぺただ。
死がいなどには、わたしはるすを使ってやります。
わたしの流儀は、ねずみを見るねこというところですな。

主

よかろう、それはおまえにまかしておく。
あれの霊をその本源からひき離して、
おまえにあれがつかまえられるようなら、あの男を堕落さして
いっしょにおまえの道を連れて行って見い。
そうして恥じ入るがよいぞ、こう白状せねばならぬことになったら——
善人は、よしや暗黒な衝迫の中にいても
正しい道をばきっと承知しているものだと。

メフィストーフェレス

そうでしょうとも。たゞそれは永続きがしないのです。
わたしにはかけに負ける心配なんかてんでありませんな。
わたしが目的を果たした時には、

胸いっぱいの凱歌を揚げることを許してください。
あれにちりあくたを、しかもうまがって、食わせますぜ、
わたしの叔母の、有名なへびのように。

主

その時もおまえは遠慮なくふるまってよろしい、
わしはおまえのなかまを一度も憎んだことはない。
いっさいの否定する霊どものうちで
わしがいっとう荷やっかいにしないのは悪戯者だ。
人間の活動はあまりにもゆるみがちだ、
かれはすぐにも無條件に休息したがる、
それだからわしはわざとかれになかまをつけておいて
それが突っついたりひねったり、悪魔として創造しなくてはならぬようにするのだ。
だがおまえたち、ほんとうの神の子どもは、
このいき〳〵と、豊かな美しさを喜ぶがよい。
生成してやまず、永遠にはたらき生きるものに、
愛の優しききずなをもって閉まれ、
蕩揺する現象の中に漂うものを、
持続する思想をもってつなぎとめるがよい。

（天閉じ、大天使たち互に立ち離れる。）

メフィストーフェレス（独白）

おれは時々あのおじいさんを見るのが好きだ、
そこであれとなかたがいをせぬように氣をつけている。
大だんなとしては全く感心なことさ、
あんなに人間らしく、惡魔そのものとさえ口をきくのは。

（阿部次郎訳「ファウスト」による）

五　ガラス戸の中

夏目漱石

一

ガラス戸の中から外を見渡すと、霜よけをしたばしょうだの、赤い実のなったうめもどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ目に着くが、そのほかにこれといって数えたてるほどのものは、ほとんど視線にはいって來ない。書斎にいる私の眼界はきわめて單調で、そうしてまたきわめて狹いのである。

その上、私は去年の暮れから、かぜをひいてほとんど表へ出ずに、毎日このガラス戸の中にばかりすわっているので、世間の樣子はちっともわからない。心持が惡いから読書もあまりしない。私はただすわったり寢たりして、その日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。氣分も多少は変わる。いくら狹い世界の中でも狹いなりに事件が起って來る。それから、小さい私と廣い世の中とを隔離しているこのガラス戸の中へ、時々人がはいって來る。それがまた私にとっては思いがけない人で、私の思いがけないことを言ったりしたりする。私は興味に充ちた目をもって、それらの人を迎えたり送ったりしたことさえある。

私はそんなものを少し書きつゞけてみようかと思う。私はそうした種類の文字が、いそがしい人の目に、どれほどつまらなく映るだろうかとけねんしている。私は電車の中でポッケットから新聞を出して、大きな活字だけに目を注いでいる購読者の前に、私の書くような閑散な文字を並べて紙面をうずめて見せるのを恥ずかしいものの一つに考える。これらの人々は、火事や、どろぼうや、人殺しや、すべてその日その日の出來事のうちで、自分が重大と思う事件か、もしくは自分の神経を相当に刺激し得る辛辣な記事のほかには、新聞を手に取る必要を認めていないくらい、時間に余裕を持たないのだから。――かれらは停留場で電車を待ち合わせる間に、新聞を買って電車に乘っている間に、きのう起った社会の変化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポッケットに收めた新聞紙のことはまるで忘れてしまわなければならないほどいそがしいのだから。

私は今、これほど切りつめられた時間しか自由にできない人たちのけいべつをおかして書くのである。

二

私はその女に前後四、五回会った。

はじめてたずねられた時、私はるすであった。取次のものが紹介狀を持って來るように注意したら、

彼女は別にそんなものをもらうところがないといって帰って行ったそうである。

それから一日ほどたって、女は手紙でじかに私の都合を聞き合わせに來た。その手紙の封筒から、私は女がつい目と鼻の間に住んでいることを知った。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやった。

女は約束の時間をたがえず來た。三つがしわの紋のついた、はでな色のちりめんの羽織を着ているのが、一番先に私の目に映った。女は私の書いたものをたいてい読んでいるらしかった。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行った。しかし自分の著作について、初見の人から賛辞ばかり受けているのはありがたいようで、はなはだこそばゆいものである。実をいうと私はへきえきした。

一週間おいて女は再び來た。そうして、私の作物をまた賞めてくれた。けれども、私の心はむしろそういう話題を避けたがっていた。三度目に來た時、女は何かに感激したものと見えて、たもとからハンケチを出して、しきりに涙をぬぐった。そうして私に、自分のこれまで経過して來た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。しかしその話を聴かない私には、なんという返事も與えられなかった。私は女に向かって、よし書くにしたところで、迷惑を感ずる人が出て來はしないかときいてみた。女は存外はっきりした口調で、実名さえ出さなければかまわないと答えた。それで私は、とにかく彼女の経歴を聴くために、とくに時間をこしらえた。

するとその日になって、女は私に会いたいという別の人を連れて來て、例の話はこの次に延ばしてもらいたいと言った。私にはもとより彼女の違約を責める氣はなかった。ふたりを相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書斎にすわったのは、その次の日の晩であった。彼女は自分の前に置かれたきりの手あぶりの灰を、しんちゅうの火ばしで突っつきながら、悲しい身の上話を始める前、默っている私にこう言った。

「この間は興奮して私のことを書いていただきたいように申しあげましたが、それはやめにいたします。ただ先生に聞いていただくだけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事がらが出て來ても、決して書く氣づかいはありませんから御安心なさい。」

私が十分な保証を女に與えたので、女はそれではと言って、彼女の七、八年前からの経歴を話しはじめた。私は默然(もくねん)として、女の顔を見守っていた。しかし女は多く目を伏せて、火ばちの中ばかりながめていた。そうしてきれいな指で、しんちゅうの火ばしを握っては、灰の中へ突き刺した。

時々ふに落ちないところが出て來ると、私は女に向かって短い質問をかけた。女は簡単にまた私の納得できるように答をした。しかしたいていは自分一人で口をきいていたので、私はむしろ木像のようにじっとしているだけであった。

やがて女のほおはほてって赤くなった。おしろいをつけていないせいか、そのほてったほおの色が著しく私の目についた。うつむきになっているので、たくさんある黒い髪の毛も、自然私の注意をひく種になった。

女の告白は、聴いている私を息苦しくしたくらいに悲痛をきわめたものであった。彼女は私に向か

ってこんな質問をかけた。――

「もし先生が小説をお書きになる場合には、その女の始末をどうなさいますか。」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方がいいとお思いになりますか、それとも生きているようにお書きになりますか。」

私はどちらにでも書ける答えて、暗に女の氣色をうかゞった。女はもっとはっきりしたあいさつを私から要求するように見えた。私はしかたなしにこう答えた。

「生きるということを人間の中心点として考えれば、そのまゝにしていてさしつかえないでしょう。しかし美しいものや、け高いものを一義に置いて人間を評價すれば、問題が違って來るかも知れません。」

「先生はどちらをお択びになりますか。」

私はまたちゅうちょした。默って女のいうことを聞いているよりほかにしかたがなかった。

「私は今持っているこの美しい心持が、時間というもののためにだん〳〵薄れて行くのがこわくってたまらないのです。この記憶が消えてしまって、たゞ漫然と魂のぬけがらのように生きている未來を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくってたまらないのです。」

私は女が今廣い世間の中にたったひとり立って、一寸も身動きのできない位置にいることを知っていた。そうしてそれが私の力でどうするわけにもいかないほどに、せっぱつまった境遇であることも知っていた。私は手のつけようのない人の苦痛を傍觀する位置に立たせられてじっとしていた。

私は服藥の時間を計るため、客の前をはゞからず常に懐中時計をざぶとんのわきに置く癖を持っていた。

「もう十一時だからお帰りなさい。」と私はしまいに女に言った。女はいやな顔もせずに立ちあがった。

私はまた、「夜がふけたから送って行ってあげましょう。」と言って、女とともにくつぬぎにおりた。その時、美しい月が靜かな夜を残るくまなく照らしていた。往來へ出ると、ひっそりした土の上にひゞくげたの音はまるで聞えなかった。私はふとところ手をしたまゝ帽子もかぶらずに、女の後について行った。曲がり角の所で女はちょっと会釈して、「先生に送っていたゞいてはもったいのうございます。」と言った。「もったいないわけがありません。同じ人間です。」と私は答えた。

次の曲がり角へ來た時、女は、「先生に送っていたゞくのは光栄でございます。」とまた言った。私は、「ほんとうに光栄と思いますか。」とまじめに尋ねた。女は簡單に、「思います。」とはっきり答えた。私は、「そんなら死なずに生きていらっしゃい。」と言った。私は、女がこのことばをどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行って、またうちの方へ引き返したのである。

むせっぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜、かえって人間らしいいい心持を久しぶりに經驗した。そうして、それが尊い文藝上の作物を読んだあとの氣分と同じものだということに氣がついた。有樂座や常劇へ行って得意になっていた自分の過去の影法師が、なんとなくあさましく感ぜられた。

不愉快に充ちた人生をとぼ〳〵たどりつゝある私は、自分のいつか一度到着しなければならない死

という境地について常に考えている。そうしてその死というものを、生よりは樂なものだとばかり信じている。ある時は、それを人間として達し得る最上至高の狀態だと思うこともある。

「死は生よりも尊い。」

こういうことばが、近ごろでは絶えず私の胸を往來するようになった。

しかし現在の私は今まのあたりに生きている。私の父母、私の祖父母、私の曾祖父母、それから順次にさかのぼって、百年、二百年、ないし千年万年の間に馴致された習慣を、私一代で解脱することができないので、私は依然としてこの生に執着しているのである。

だから、私のひとに與える助言は、どうしてもこの生の許す範囲内においてしなければすまないように思う。どういうふうに生きて行くかという狹い区域の中でばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向かわなければならないと思う。すでに生の中に活動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互の根本義は、いかに苦しくても、いかにみにくくても、この生の上に置かれたものと解釈するのがあたりまえであるから。

「もし生きているのが苦痛なら、死んだらいいでしょう。」

こうしたことばは、どんなに情なく世を観ずる人の口からも聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠りに赴こうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばすくふうをこらしている。こんな拷問に近い所作が、人間の德義として許されているのを見ても、いかに根强くわれわれが生の一字に執着しているかがわかる。私はついにその人に死をすゝめることができなかった。

その人は、とても回復の見こみのつかないほど深く自分の胸を傷つけられていた。同時にその傷が、普通の人の経驗にないような美しい思い出の種となって、その人の面を輝かしていた。

彼女はその美しいものを、宝石のごとく大事に、永久彼女の胸の奥に抱き締めていたがった。不幸にして、その美しいものは、とりもなおさず彼女を死以上に苦しめる手傷そのものであった。二つの物は紙の裏表のごとく、とうてい引き離せないのである。

私は彼女に向かって、すべてをいやす「時」の流れに從ってくだれと言った。彼女は、もしそうしたら、このたいせつな記憶が次第にはげて行くだろうと嘆いた。

公平な「時」は、大事な宝物を彼女の手から奪う代わりに、その傷口も次第に療治してくれるのである。烈しい生の歡喜を夢のようにぼかしてしまうと同時に、今の歡喜に伴なうなま〳〵しい苦痛も取りのける手段を怠らないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱烈な記憶を取りあげても、彼女の傷口から滴る血潮を「時」にぬぐわしめようとした。いくら平凡でも、生きて行く方が死ぬよりも、私から見た彼女には適当だったからである。

かくして、常に生よりも死を尊いと信じている私の希望と助言は、ついにこの不愉快に充ちた生というものを超越することができなかった。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸な自然主義者として証拠だてたように見えてならなかった。私は今でも半信半疑の目でじっと自分の心をながめている。

三

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜いちゃんというなかのいい友だちがあった。喜いちゃんも

私も漢学が好きだったので、わかりもしないくせに、よく文章の議論などをしておもしろがった。かれはどこから聴いて來るのか、調べて來るのか、よくむずかしい漢籍の名まえなどを挙げて、私を驚かすことが多かった。

かれはある日私のへや同様になっている玄関にあがりこんで、ふところから二冊つゞきの書物を出して見せた。それは確かに写本であった。しかも漢文でつゞってあったように思う。私は喜いちゃんからその書物を受け取って、無意味にそこゝを引っくり返して見ていた。実は何がなんだか私にはさっぱりわからなかったのである。しかし喜いちゃんは、「それを知ってるか。」などと露骨なことを言うたちではなかった。

「これは大田南畝の自筆なんだがね。ぼくの友だちがそれを賣りたいというので、きみに見せに來たんだが、買ってやらないか。」

私は大田南畝という人を知らなかった。

「大田南畝って一体なんだい。」

「蜀山人のことさ。有名な蜀山人さ。」

無学な私は、蜀山人という名まえさえまだ知らなかった。しかし喜いちゃんにそう言われてみると、なんだか貴重の書物らしい氣がした。

「いくらなら賣るのかい。」ときいてみた。

「五十錢に賣りたいと言うんだがね。どうだろう。」

私は考えた。そうして何しろねぎってみるのが上策だと思いついた。

「二十五錢なら買ってもいい。」

「それじゃ二十五錢でもかまわないから、買ってやりたまえ。」

喜いちゃんはこう言いつゝ、私から二十五錢受け取っておいて、またしきりにその本の効能を述べたてた。私にはむろんその書物がわからないのだから、それほどうれしくもなかったけれども、何しろ損はしないだろうというだけの満足はあった。私はその夜、南畝莠言—たしかそんな名まえだと記憶しているが、それを机の上に載せて寢た。

翌日になると、喜いちゃんがまたぶらりとやって來た。

「きみ、きのう買ってもらった本のことだがね。」

喜いちゃんはそれだけ言って、私の顔を見ながらぐず〳〵している。私は、机の上に載せてあった書物に目を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい。」

「実はあすこのうちのおやじに知れたもんだから、おやじがたいへんおこってね。どうか返してもらって來てくれってぼくに頼むんだよ。ぼくも、一ぺんきみに渡したもんだから、いやだったけれども、しかたがないからまた來たのさ。」

「本を取りにかい。」

「取りにってわけでもないけれども、もしきみの方でさしつかえがないなら、返してやってくれないか。何しろ二十五錢じゃ安過ぎるって言うんだから。」

この最後の一言で、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜んでいた不快—不善の

行爲から起る不快―をはっきり自覚しはじめた。そうして一方ではずるい私を怒るとともに、一方では二十五銭で賣った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時にやわらげたものだろう。私はにがい顔をしてしばらく默っていた。

私のこの心理狀態は、今の私が子供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的めいりょうに描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんどわからなかった。私さえたじにがい顔をしたという結果だけしか自覚し得なかったのだから、相手の喜いちゃんにはむろんそれ以上わかるはずがなかった。かっこの中で言うべきことかも知れないが、年をとった今日でも、私にはよくこんな現象が起って來る。それでよくひとから誤解される。

喜いちゃんは私の顔を見て、「二十五銭ではほんとうに安過ぎるんだとさ。」と言った。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取って、喜いちゃんの前に突き出した。

「じゃ、返そう。」

「どうも失敬した。何しろ、安公の持ってるものでないんだからしかたがない。おやじのうちに昔からあったやつを、そっと賣ってこづかいにしようって言うんだからね。」

私はぶり〳〵してなんとも答えなかった。喜いちゃんはたもとから二十五銭出して私の前に置きかけたが、私はそれに手を触れようともしなかった。

「その金なら取らないよ。」

「なぜ。」

「なぜでも取らない。」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、たゞ本だけ返すのは。本を返すくらいなら二十五銭も取りたまいな。」

私はたまらなくなった。

「本はぼくのものだよ。いったん買った以上はぼくのものにきまってるじゃないか。」

「そりゃそうに違いない。違いないが向こうのうちでも困ってるんだから。」

「だから返すと言ってるじゃないか。だけどぼくは金を取るわけがないんだ。」

「そんなわからないことを言わずに、まあ取っておきたまいな。」

「ぼくはやるんだよ。ぼくの本だけども、ほしければやろうと言うんだよ。やるんだから本だけ持ってったらいいじゃないか。」

「そうか、そんなら、そうしよう。」

喜いちゃんは、とう〳〵本だけ持って帰った。そして私は、なんの意味なしに二十五銭のこづかいを取られてしまったのである。

四

世の中に住む人間の一人として、私は全く孤立して生存するわけに行かない。自然、ひとと交渉の必要がどこからか起って來る。時候のあいさつ、用談、それからもっとこみ入ったかけあい―これらから脱却することは、いかに枯淡な生活を送っている私にもむずかしいのである。

私はなんでもひとの言うことをまに受けて、すべて正面からかれらの言語動作を解釈すべきものだろうか。もし私が持って生まれたこの單純な性情に自己を託してかえりみないとすると、時々とんで

もない人からだまされることがあるだろう。その結果かげでばかにされたり、ひやかされたりする。極端な場合には、自分の面前でさえ忍ぶべからざる侮辱を受けないとも限らない。

それでは、ひとはみな、すれからしのうそつきばかりと思って、はじめから相手のことばに耳も貸さず、心も傾けず、ある時はその裏面に潜んでいるらしい反対の意味だけを胸に收めて、それで賢い人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出だし得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないとも限らない。その上恐るべき過失を犯す覚悟を、初手から仮定してかゝらなければならない。ある時は必然の結果として、罪のないひとを侮辱するくらいの厚顔を準備しておかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどっちかにかたづけようとすると、私の心にまた一種の苦悶が起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた、善い人を少しでも傷つけたくない。そうして私の前に現われて來る人は、こと〴〵く悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も、相手次第でいろ〳〵に変わって行かなければならないのである。

この変化はだれにでも必要で、まただれでも実行していることだろうと思うが、それが果たして相手にぴたりと合って、寸分まちがいのない、微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いているだろうか。私の大いなる疑問は常にそこにわだかまっている。

私のひがみを別にして、私は過去において、多くの人からばかにされたという、にがい記憶を持っている。同時に、先方の言うことやすることを、わざと平たく取らずに、暗にその人の品性に恥をかかしたと同じような解釈をした経験もたくさんありはしまいかと思う。

ひとに対する私の態度は、まず今までの私の経験から來る。それから前後の関係と四囲の狀況から出る。最後に、あいまいなことばではあるが、私が天から授かった直覚がなにぶんかはたらく。そうして、相手にばかにされたり、また相手をばかにしたり、まれには相手にかれ相当な待遇を與えたりしている。

しかし今までの経験というものは、廣いようでその実はなはだ狹い。ある社会の一部分で、何度となくくり返された経験を、他の一部分へ持って行くと、まるで通用しないことが多い。前後の関係とか四囲の狀況とかいったところで、千差万別なのだから、その應用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮をめぐらさなければ役に立たなくなる。しかもそれをめぐらす時間も、材料も、十分給與されていない場合が多い。

それで私は、ともすると事実あるのだか、またないのだかわからない、きわめてあやふやな自分の直覚というものを主位に置いて、ひとを判断したくなる。そうして私の直覚が果たして当たったか当たらないか、要するに客観的事実によって、それを確かめる機会を持たないことが多い。そこにまた私の疑いが始終もやのようにかゝって、私の心を苦しめている。

もし世の中に全知全能の神があるならば、私はその神の前にひざまずいて、私に毫髪の疑いをさしはさむ余地もないほど明らかな直覚を與えて、私をこの苦悶から解脱せしめんことを祈る。でなければ、この不明な私の前に出て來るすべての人を玲瓏透徹な正直者に変化して、私とその人との魂がぴたりと合うような幸福を授けたまわんことを祈る。今の私は、ばかで人にだまされるか、あるいは疑い深くて人を容れることができないか、この両方だけしかないような氣がする。不安で、不透明で、

不愉快に充ちている。もしそれが生涯つゞくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう。

五

きょうは日曜なので、子供が学校へ行かないから、下女も氣を許したものと見えて、いつもより遲く起きたようである。それでも私の床を離れたのは、七時十五分過ぎであった。顔を洗ってから、例の通りトーストと牛乳と半熟の卵をたべて、かわやにのぼろうとすると、あいにくこえ取りが來ているので、私はしばらく出たことのない裏庭の方へ歩を移した。すると、植木屋が物置の中で何かかたづけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から、威勢のいい火が燃えあがる周囲に、女の子が三人ばかり心持よさそうに暖を取っている様子が私の注意をひいた。

「そんなにたき火にあたると顔がまっくろになるよ。」と言ったら、末の子が、「いやあだ。」と答えた。私は石がきの上から、遠くに見える屋根がわらの、融けつくした霜にぬれて朝日にきらつく色をながめたあと、また家の中へ引き返した。

親類の子が來てそうじをしている書斎のせいとんするのを待って、私は机を縁側に持ち出した。そこで日あたりのいいらんかんに身をもたせたり、ほおづえを突いて考えたり、またしばらくはじっと動かずにたゞ魂を自由に遊ばせておいて見たりした。

軽い風が時々はち植えの九花蘭の長い葉を動かしに來た。庭木の中でうぐいすが、おり〳〵へたなさえずりを聽かせた。毎日ガラス戸の中にすわっていた私は、まだ冬だ冬だと思っているうちに、春はいつしか私の心を蕩揺しはじめたのである。

私の冥想はいつまですわっていても結晶しなかった。筆をとって書こうとすれば、書く種は無盡藏にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだというのんきな考えも起って來た。しばらくそこでたゞずんでいるうちに、今度は今まで書いたことが全く無意味のように思われ出した。なぜあんなものを書いたのだろうという矛盾が私を嘲弄しはじめた。ありがたいことに私の神経は静まっていた。この嘲弄の上に乘って、ふわ〳〵と高い冥想の領分にのぼって行くのが、自分にはたいへんな愉快になった。自分のばかな性質を、雲の上から見おろして笑いたくなった私は、自分で自分をけいべつする氣分に揺られながら、揺籃の中で眠る子供にすぎなかった。

私は今までひとのことと私のことをごちゃごちゃに書いた。ひとのことを書く時には、なるべく相手の迷惑にならないようにとのけねんがあった。私の身の上を語る時分には、かえって比較的自由な空氣の中に呼吸することができた。それでも私は、まだ私に対して全く色けを取り除き得る程度に達していなかった。うそをついて世間を欺くほどの衒氣がないにしても、もっと卑しいところ、もっと悪いところ、もっと面目を失するような自分の欠点を、つい発表せずにしまった。聖オーガスチンの懺悔、ルソーの懺悔、オピアムイーターの懺悔、―それをいくらたどって行っても、ほんとうの事実は人間の力で叙述できるはずがないとだれかが言ったことがある。まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、―もしそれを罪といい得るならば、―すこぶる明かるいところからばかり写されていただろう。そこにある人は一種の不快を感ずるかも知れない。しかし私自身は、今その不快の上にまたがって、一般の人類をひろく見渡しながら微笑しているのである。今までつまらないことを書いた自分をも、同じ目で見渡して、あたかもそれが他人であったかの感を抱きつゝ、やはり微笑してい

るのである。

まだうぐいすが庭で時々鳴く。春風がおり〳〵思い出したように九花蘭の葉を動かしに來る。ねこがどこかで痛くかまれたこめかみを日にさらして、暖かそうに眠っている。さっきまで庭でゴム風船を揚げて騒いでいた子供たちは、みんな連れだって活動写眞へ行ってしまった。家も心もひっそりとしたうちに、私はガラス戸をあけ放って、静かな春の光に包まれながら、うっとりとこの稿を書き終るのである。そうした後で、私はちょっとひじを曲げて、この縁側にひとねむり眠るつもりである。

（漱石全集）

六年來稽古

世阿彌

七歳

この藝において、大方、七歳をもてはじめとす。このころの能の稽古、必ずそのもの自然といたすことに、得たる風体あるべし。舞・はたらきの間、音曲、もしくは、怒れることなどにてもあれ、ふとしいださんかゝりを、うちまかせて、心のまゝにせさすべし。さのみに、善き悪しきとは、教ふべからず。あまりにいたくいさむれば、わらべは氣を失ひて、能ものぐさくなりたちぬれば、やがて能はとまるなり。たゞ、音曲・はたらき・舞などならではせさすべからず。さのみのものまねは、たとひすべくとも、教ふまじきなり。大場などのわきの申樂にはたつべからず。三番・四番の、時分のよからんずるに、得たらん風体をせさすべし。

十二、三より

この年のころよりは、はややう〳〵声も調子にかゝり、能も心づくころなれば、次第次第に物数も教ふべし。まづ童形なれば、何としたるも幽玄なり。声も立つころなり。二つのたよりあれば、わろきことは隠れ、よきことはいよ〳〵花めけり。

大方、兒の申樂に、さのみに細かなるものまねなどは、せさすべからず。当座も似合はず、能もあがらぬ相なり。たゞし、堪能になりぬれば、何としたるもよかるべし。兒といひ、声といひ、しかも上手ならば、何かはわろかるべき。

さりながら、この花は誠の花にはあらず。たゞ時分の花なり。されば、この時分の稽古、すべてすべて易きなり。さるほどに、一期の能の定めには成るまじきなり。

このころの稽古、易きところを花にあてて、わざをば大事にすべし。はたらきをもたしやかに、音曲をも、文字にさは〳〵とあたり、舞をも、手を定めて、大事にして稽古すべし。

十七、八より

このころは、また、あまりの大事にて、稽古多からず。まづ、声変はりぬれば、第一の花失せたり。体も腰高になれば、かゝり失せて、過ぎしころの、声も盛りに、花やかに、やすかりし時分の移りに、手だてはたと変はりぬれば、氣を失ふ。結句、見物衆もをかしげなる氣色見えぬれば、恥づかしさと申し、かれこれ、こゝにて退屈するなり。

このころの稽古には、指をさして人に笑はるるとも、それをば願みず、内にて、声のとゞかんず

る調子にて、よひ曉の声を使ひ、心中には願力を起して、一期のさかひこゝなりと、生涯にかけて、能を捨てぬよりほかは、稽古あるべからず。こゝにて捨つれば、そのまゝ能はとまるべし。

総じて、調子は声よりといへども、黄鐘・盤渉をもて用ふべし。調子にさのみかゝれば、身なりに癖出で來るものなり。また、声も年寄りて損ずる相なり。

二十四、五

このころ、一期の藝能の定まるはじめなり。さるほどに、稽古のさかひなり。声もすでになほり、体も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。声と身なりなり。これ二つは、この時分に定まるなり。歳盛りに向かふ藝能の生ずるところなり。

さるほどに、よそ目にも、すは上手出で來たりとて、人も目に立つるなり。もと、名人などなれども、当座の花に珍しくして、立ち合ひ勝負にも、いつたん勝つ時は、人も思ひあげ、主も上手と思ひしむるなり。これ、かへすがへす主のためあだなり。これも誠の花にはあらず。年の盛りと、見る人の、いつたんの心の珍しき花なり。まことの目利きは見分くべし。

このころの花こそ、初心と申すころなるを、究めたるやうに主の思ひて、はや申樂にそばみたるりんぜつとし、至りたる風体をすること、あさましきことなり。たとひ、人もほめ、名人などに勝つとも、これは、いつたん珍しき花なりと思ひさとりて、いよ〳〵ものまねをもすぐにし定め、名を得たらん人に、事をこまかに問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花を、誠の花と知る心が、眞実の花になほ遠ざかる心なり。たゞ人ごとに、この時分の花におきて、やがて花の尖するをも知らず。

初心と申すはこのころのことなり。

一、公案して思ふべし。わが位のほど〳〵よく〳〵心得ぬれば、そのほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、もとありつる位の花も失するなり。よく〳〵心得べし。

三十四、五

このころの能、盛りのきはめなり。こゝにて、この條々を究めさとりて、堪能になれば、さだめて天下に許され、名望を得べし。もし、この時分に、天下の許されも足らずに、名望も思ふほどなくは、いかなる上手なりとも、いまだ誠の花を究めぬ仕手と知るべし。もし究めずは、四十より能はさがるべし。それ、後の証拠なるべし。さるほどに、あがるは三十四、五までのころ、さがるは四十以來なり。かへすがへす、このころ天下の許されを得ずは、能を究めたるとは思ふべからず。

こゝにて、なほ慎しむべし。このころは過ぎしかたをも覚え、また行く先の手だてをも覚ゆる時分なり。このころ究めずは、この後天下の許されを得んこと、かへすがへす難かるべし。

四十四、五

このころよりは、能の手だて、大方変はるべし。たとひ、天下に許され、能に得法したりとも、それにつきても、よきわきの仕手を持つべし。能はさがらねども、力なく、やう〳〵年闌け行けば、身の花も、よそ目の花も失するなり。まづすぐれたらん美男は知らず、よきほどの人も、直面の申樂は、年寄りては見られぬものなり。さるほどに、この一方は欠けたり。

このころよりは、さのみに、細かなるものまねをばすまじきなり。大方似合ひたる風体を、やすやすと、骨を折らで、わきの仕手に花を持たせて、あひしらひのやうに、少な〳〵とすべし。たとひ、わきの仕手なからんにつけても、いよ〳〵細かに身を砕く能をばすまじきなり。何としても、よそ目花なし。もし、このころまで失せざらん花こそ、誠の花にてはあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらん花を持ちたる仕手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。たとひ、天下の許されを得たる仕手なりとも、さやうの上手は、ことにわが身を知るべければ、なほ〳〵わきの仕手をたしなみ、さのみに身を砕きて、難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやうにわが身を知る心、得たる人の心なるべし。

五十有余

このころよりは、大方、せぬならでは、手だてあるまじ。きりんも老いては駑馬に劣ると申すことあり。さりながら、まことに得たらん能者ならば、物数はみな〳〵失せて、善悪見所は少なくとも、花は残るべし。

亡父にて候ひし者は、五十二と申しし五月十九日に死去せしが、その月の四日、駿河國浅間の御前にて法樂仕り、その日の申樂、ことに花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。およそ、そのころ物数をば、はや初心に譲りて、易きところを少な〳〵といろへてせしかども、花はいやましに見えしなり。これ、まことに得たりし花なるが故に、能は枝葉も少なく、老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、まのあたり、老骨に残りし花の証拠なり。

（風姿花傳）

七　國民的文学と世界的文学

土居光知

（文学序説）

國語学習の手引

露光量調整、重複撮影

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行ってほしい。

國語学習の手引

一　奥の細道抄

(1) 芭蕉について調べる。(傳記、著作、文学上の功績など。)
(2) むずかしい語句やわからない事がらを抜き出し、辞書や註釈書で調べる。
(3) 繰り返し読んで古典のもつ調子になれる。
(4) 好きな章を口語に直してみる。
(5) 好きな俳句を選び出し、その情景を文に書いてみる。
(6) 「奥の細道」全文を読んでみる。
(7) 芭蕉の俳文、紀行文を読んでみる。
(8) 次の題で文を作る。
　イ　奥の細道を読んで
　ロ　旅人芭蕉

二　寒山拾得

(1) 主題(テーマ)を考える。
(2) 構成を調べる。

露光量調整、重複撮影

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行ってほしい。

國語学習の手引

一　奥の細道抄

（1）芭蕉について調べる。（傳記、著作、文学上の功績など。）

（2）むずかしい語句やわからない事がらを抜き出し、辞書や註釈書で調べる。

（3）繰り返し読んで古典のもつ調子になれる。

（4）好きな章を口語に直してみる。

（5）好きな俳句を選び出し、その情景を文に書いてみる。

（6）「奥の細道」全文を読んでみる。

（7）芭蕉の俳文、紀行文を読んでみる。

（8）次の題で文を作る。

イ　奥の細道を読んで

ロ　旅人芭蕉

二　寒山拾得

（1）主題（テーマ）を考える。

（2）構成を調べる。

(3) 描写のすぐれたところを抜き出してみる。
(4) 読後感を話し合う。(主題・構成・人物・描写・説明などについて)
(5) 童話風に弟妹に話して聞かせる。
(6) 短編のシナリオあるいは戯曲に脚色する。
(7) 鴎外の傳記を調べる。
(8) 鴎外の他の短編小説を読んでみる。

三　シェークスピアの女性観

(1) この課は放送原稿である。聞いてよくわかるように、読み方をくふうしてみる。ひとの読むのを聞いて、批評し合う。
(2) 今までに読んだシェークスピアの作品について話し合う。
(ロメオとジュリエット、リヤ王、ハムレット、オセロ、アントニオとクレオパトラ、テンペスト、マクベス、ベニスの商人など)
(3) ジュリエット、マクベス夫人、ポーシャについての筆者の見解を要約する。
(4) 「ベニスの商人」(高等國語二上、五)を読み返し、筆者の見解について話し合う。
(5) めい〳〵の女性観を発表する。その内容や話し方について批評し合う。

四　天上の序曲

(1) 次のことを調べる。
イ　三人の大天使は何を賛美しているか。
ロ　メフィストーフェレスは人間をどう見ているか。
ハ　主は、人間をどう見ているか。(努力している間は、人間は迷うものだ。)
(2) (1)のロとハを比べて、めい〳〵の感想を話し合う。
(3) ファウストについてのメフィストーフェレスと主との対話を詳しく調べてみる。
(4) (3)をもとにして、めい〳〵の見解を話し合う。
(5) みなで読み方をくふうしてみる。
(6) ゲーテの作品を読んでみる。

五　ガラス戸の中

(1) 各章の要点を書いてみる。
(2) 次のことを調べる。
イ　一について　「ガラス戸の中」を書いたわけ。
ロ　二について　どんな女だったか、作者の氣持や態度はどうだったか。
ハ　三について　これに似た思い出はないか、あったらこれを文にまとめてみる。
ニ　四について　ひととの交渉はどうであるか、どうありたいと言っているか。
ホ　五について　書いた後の作者の氣持。

（3）どの文章がおもしろかったか、その感想や批評を書く。
（4）「ガラス戸の中」の全文を読んでみる。
（5）漱石の小品、紀行、随筆を読んでみる。

六　年來稽古

「花傳書」詳しく言えば「風姿花傳」は、能樂の大成者世阿彌が、相傳の祕書として書き残したもので、「序」に始まって、「年來稽古條々」「物学條々」「問答條々」「神儀」「奥儀」「花修」「別紙口傳」の七編からできている。世阿彌の遺著は、すべて能樂研究の根本資料であるが、ことに本書は能樂の根本精神ともいうべき物まねおよび幽玄の風姿すなわち「花」についての敘述が主となっていて、その基礎的、全般的藝術論として、最も尊重すべきものである。この課には「年來稽古條條」の全部がとってある。

（1）むずかしい語句やわからない事がらを抜き出し、辞書や参考書で調べてみる。
黄鐘、盤渉―十二律（互に半音の音程を持った十二個の音をもって一つの音階を形成するもの）の一つ。
りんぜつとし――「りんぜつ」は故実なく勝手にやる意か。「と」は「を」が連声によって轉じたものか。
（2）各章の要点を表にし、各年代を比較してみる。
（3）「十二、三より」と「十七、八より」を口語に直してみる。
（4）「花」という用例を調べて、その意味を考える。

（5）この課を学習して、どんなことがわかったか、どんなことを教えられたか、それを話し合ったり、文に書いたりする。

七　國民的文学と世界的文学

（1）次の事がらについて作者の見解を調べる。
イ　國民的文学の観念
ロ　國民的文学の観点――二つの傾向とその融合
ハ　日本文学の概観
ニ　奈良時代の文学
ホ　平安時代の文学
ヘ　鎌倉時代の宗教と文学
ト　江戸文学の思潮
チ　明治以後の文藝の発達
（2）國文学史を読んでこの課の内容を具体的に説明する。
（3）次のことを調べて、説明できるようにする。
文学の轉生・展開、主観に沈潜する、敘事詩・抒情詩・民謡・五山文学・ロマンス・人間性・現実主義・神秘主義・理想主義・自然主義・人道主義。
（4）明治から現代にいたる文学の展開を一つの文にまとめてみる。

昭和二十三年四月六日 驟刻発行
昭和二十五年一月十一日 修正再版印刷
昭和二十五年一月十五日 修正再版発行
〔昭和二十五年一月十五日文部省検査済〕

高等國語 三上
昭和二十五年度用
定價金十五円十錢

著作者 文部省
発行者 東京都新宿区市谷砂土原町一丁目二番地 教育図書株式会社 代表者 小松謙助
印刷者 東京都新宿区市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式会社 代表者 佐久間長吉郎
発行所 教育図書株式会社

Approved by Ministry of Education (Date Oct. 24, 1949)

(教科書番号)高國1200

Kd 70.3-1-3.12